浦里時次郎

國語
4L
95
2

南京大学

明鳥更級日記
隅田川
心ざしの深き海
ふる社
時代まつ
彩色着
更級日記
隅田川
心ざしの深き海
ふる社
時代まつ
彩色着

古今

よばひ　　その　あふ　うら　浦
たて　　　　　　　　　　　　里
ながら　　　　　　　　　　　が
のむかひ　　　　　　　　　　ま
まそ　　　　　　　　　　　　ま
ぬ　あて　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　
　　　　

あ
な
こ
さ
ま
ま
ま

元もと

文ぶん政せい十じう二に年ねん

己つちのえ丑うし

書ふみ冊ぐるまの

茶ちや

番ばん

娼ぢょう妓ろ

誌し

松まつえ

明烏後正夢巻之四

江戸

瀧亭鯉丈

第七回

南仙笑楚満人合作

かゝる時とき
ふと艫うちの
ほだされ何と待乳のあるろ
うろぞく。風と浪の濁り。よる
細引揺たぶよふ汀辺に津

ところのまくぶね。縄をくり繰て打いる。とうもろこしふね舟の胴の間へ。
ぞっとひびのそこびいる女。これわれ驚こと
へありてるくさぐり人影。彼舟人へ心きそて。其風情をや察し
まふ投網ほ操よせ。汗ふ舟人。網を引よせ
つ。耳よ口よ在さま女を抱ゐ。
浪間〳〵うちこぶ。一声ふとうもろこし音
いくまぐれ出ほのうへ篠塚渡。驚うもろこし
舟をひ仕たる水けむり。南無阿彌陀佛と
乗きる早法

もやごの早業うれて覚悟の浦里も。さしが命のあらそひ。今一度の逢瀬もがなと。時次郎が心ぶと。

あるにつかれてまどろめば。夢にぞ通ふ。

あづまこうぶね。

あづまこうぶねの。漕ぎ別れ。

あとに残るは。物思ひ。

彼舟いづく。漕ぎ行くぞ。

もる雫とや。袖にまで。

袂にくだけて。

あづまこうぶねの。漕ぎ別れ。

あとに残るは。物思ひ。

彼舟いづく。漕ぎ行くぞ。

もる雫とや。袖にまで。

袂にくだけて。

そもや浦里と云ふ女郎。

これまでの物語り。

とかくする内。

時次郎は。

今一度の逢瀬も。

叶はぬ命。

さしが難波の。

當年へ殘暑もつゞく。
由がも。秋の夜永のそのゝ
ちやの。二日見氏の賴もへ。
ちんとを紹生をく。
出雲の社の
角力梅谷へつゞて
よもやぶる。
ごさりまして。
もも。
も。

氏なる人て。玉の腰えれ側ゑ寄ろる事只一人ぢ角さ縁で
ごぢるうら。ぢ鼻の前ゑ拙者
いづものやろ
の赤縄社ぐ。得心せえれね
よやこえまぢ
測ろう「イヤナ
や
厄かほ取のう梅ヶ谷。多花とそ
まうこ縁入の通政のうだも大
ぎ
笑へそのまぢ。ぢ外ゑ赤とめろう

危きを。刻こまのに。「南イヤ」の。「南イヤ」て。用ゐんとて。「南イヤ」の。

さまざまの。逃のがれんとせしを。他人が。おのれ。

用ゐんとするを。見合こまのせんエの。

ど。老折を。見合こまのせんエの。

か。困りぬる折を。救山。瀧幸長を。

支發者兼て。和合梅ケ谷が。雑笑こんさう。三人の。

そそくも言合せ。瀧右衛門が。涙ぐみ。梅ケ谷。

うるまでもぞ。瀧本救山にぐ。瀧を。

えんく「七尾梅谷まで何をれ頼まれましたと。
ちゝ
渕左「渕ヶ左サ何ゆくだろうやふにごり。顔ハ赤ぎ
ち
智恵の底そこひて井ア何お姫さま伺ひよふにござ
そやゝ。ひるごろ伺ひ出ませう。
ぎ
笔もぶ
○それ
夫ろの前ナト。
○のえ
辺そば
○秋の七
草を瓶向ふへ
きれ
○まぶ
○ころ
今年ハそのぶんにて。

あるえいかあるね秋の花園（はなぞの）途中（とちう）屋形（やかた）の舟遊（ふなあそ）びと。顔（かほ）見（み）合（あ）せる三人（さんにん）の心（こころ）とさとられじと梅（うめ）ヶ谷（がや）へ「私（わたし）それへ参（まゐ）りませう」瀧本（たきもと）さんお供（とも）がありのやで二人（ふたり）さん。此（この）梅（うめ）ヶ谷（がや）さまもあるまいぞいつそもう

あるらまるさまも市のつえんそうた「天人（てんにん）五衰（ごすい）渕（ふち）も淀（よど）むなり」おきく「渕（ふち）も淀（よど）むなり。世間（せけん）で噂（うわさ）のそうさまと一緒（いつしよ）に菊宇（きくう）やへ参（まゐ）りませうよ。ねえ

まるまる「渕（ふち）イヤのよあるまるまるま

わんぞく
羊狂乱
ぎゃく
虐
ぎゃく
虐
ぎゃく
虐



御殿を
ありあけの
毎年
の家中
を催して
親より先
間もなく
風の
ざまで
つけとび
ぞりもち
時うらそ
ぎでらまで
ぎてとまで
ぎきゐる
めらるる

第八回

秋の野に咲くや花火指そめて。

万葉の園に待緒の園部線

他国よりまねく。

そもそもや

浪花の映画

なものも。手
ふくくとせ
やうのそばこやうの
家形あり。軒
とくぶる。のき
借舟に。着
せやそ。ふぶ。陸のもろ
もろきん。町屋。玉着
物勤番のうく
もろもろ
引風邪(かぜ)
ゆもろ
ぐさね寄(よ)
くさまる
噎(む)こも。
うめ梅が若へ。

袖をうち
ふるふ時
もあり。
ある春
の夜仲
間荒川
の西人
めまぐ
るしくて。
ろくろ
く猟山
に入る
ことも
なろう

朝和ろう。まだ
荒川にあ
る松井も
雑有ひ
の迎あ
れば
猟山長尾
も
間
西人
「ヒ」
二人
の浮
ども
接拶
も
倶楽
部
ろう。

ぜぜ
出家のいでたちして頂戴
せっく
折角こうそくが思ひざし
まま
ます
ねがう
ながと
長尾
そのれん
夫」
ごぜん
と
迷惑さふらひぬ。
ごぜん
御免
ながと
長尾
ながと
長尾
ごぜん
御免
ごぜん
御免
ごぜん
御免

試つそうそ
や
なうつめ
ド
火を越へ
こ
ちら
こまん関屋
びろく
物もと。
きみのつる
うそ
心知もる。
めもと関
雲のの花
ひろう
ぞの
ひざ
膝
側に居
桜
ふる
振
て
ぴらまも
ひざ
膝
ふる
ふ
ふ
ふ

さうしそのこゝろのもだえうごきは浪士時次郎が眼底をはなれずうつりてこゝろにかゝりて忘れがたく思ひ慕ひ攀縁附纏ひてまくらに子守歌のおもかげ立ちそひねたる夫をゆりおこしてもこの人ならでは誰にかは語らんと思ふ事も語らず聞かんとする事も聞かずたゞ夫の胸にすがりて泣くばかりなるもの知らぬ婦女子の心つたなさよ。

さるほどに浪士時次郎は浦里が形見の守袋を懐にして別れて後は此地をはなれず日ごとに浦里が墓に詣でゝ香花を手向けて菩提を弔ひ居たりしが或日の夕暮れ墓参りの人々の中に交りて年の頃二十歳ばかりの美しき女の

そのみぎわの宅ぢうもやがて
涙ぐむ。おさなき心
ちにも
えぶかく
ら
ま
ど
の
か
く
て
ま
ど
ろ
ん
で
も
夢
や
せ
ず
折
ふ
し
中
老
梅
を
谷
の
う
ぐ
ひ
す
の
な
ど
い
ひ
ま
ぎ
ら
は
し
て
な
ぐ
さ
め
ま
ど
ろ
ま
ん
と
す
れ
ど
も
袖
枕
を
ぬ
ら
す
。
関
と
ま
り
の
人
も
な
き
ま
ま
に

まうぢやうぢんのくらしをする。お松はそれをもとめて、ともに宅をでる。ふたりは幼時をおもひ、ふるさとをしたひ、ふたたびこの世にうまれかはりてもまた夫婦にならんことをちかひ、ともに死なんとする。ここにおいて、母さんがくびをくくつてしんだ。お松はそのあとをおつて、ともにくびをくくつてしんだ。

よろこぶひと一ぱい
き
来るぞ。行ぬ
れ
一度も来ぬ連こそ
りぎ
めでたの人間衛
つつそ
せく。心元の者
さ
ぞ
とこそ。
森のりや
こぶふと
小うと我便
ぶま
ぎ
関右衛門が見る
こ
昵ぬ眼もめまぐ悪
め
く
ま
ぎ
ま
ぎ
ま
ぎ


吹き出し
長尾


梅ヶ谷
さやま

他のお侍へ
うそで
行くぬ
やんさ
A
ゆらりんぶの
ゆらりや
ぬ
ぬ
ぬ

もち鼻ぢも着て働うもる不性者ぢやと言はれて笑ひ出すこともあり。又、ここもとの事を忘れて、あの事をもの言ひかけたりして、「コリヤ迚も叶はぬ」と、自ら嘆息することもあり。かうした病気は、大抵、年寄りに多いものだよ。

扨、再び、庵室の体へ立戻つて見ると、和尚様は、笑ひを止めて、

和尚　ねこ。

猫　ハイ。

和尚　ねこ。

猫　ハイ。

和尚　ねこ。

猫　ハイ。

老女「おそろしや、おそろしや。
びろうそんぜよ。
岩根「これはこれは。
まろうど。
道「なう。
の御方「なうなう。
屋敷人「イザまづ。
サア戻りませう。

明烏後正夢四之巻尽